



TITLE:

<大會抄録>唐代遞送システムの構造とその運用：河西道を中心にして

AUTHOR(S):

荒川, 正晴

CITATION:

荒川, 正晴. <大會抄録>唐代遞送システムの構造とその運用：河西道を中心にして. 東洋史研究 1995, 54(3): 557-557

ISSUE DATE:

1995-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154532>

RIGHT:

唐代遞送システムの構造とその運用

— 河西道を中心にして —

荒川正晴

唐の公用交通は、驛を遞送據點として機能する交通網と、縣を遞送據點として廣がるそれとの二重的な構造を有していた。前者では、免課の色役である驛長・驛丁が各驛に配され、驛道に限定されたその交通機能を交えたのに對して、後者では、基本的に縣を單位に傳馬（傳送馬）が配備され、雜徭で徵發された馬夫がその飼養や縣道間の引導に當たっていた。いずれも縣で徵發された丁夫によって運用されており、交通機能の面においても、兩者は補充的關係を保つものであった。唐以前に遡ってパースペクティブに見れば、漢代に既に認められる驛制および縣を據點に機能する傳制との關連を考へる必要があろう。

ところが、八世紀以降、律令制支配の破綻が顯現化し、また公用交通・輸送の規模も擴大してゆくと、それまでの遞送體制をそのまま維持することは困難となった。驛制や傳制の弛廢が次第に表面化する一方、民間からの交通手段の雇傭が進展したことがうかがえる。こうした律令制下に構築された驛傳體制の機能が著しく低下してゆく状況のもと、新たな體制による公用交通網の維持が圖られた。なかでも、肥大化してゆく唐の財政・軍事を支えた重要な輸送路線については、開元時代に轉運使などが任じられ、そのもとで個別的な遞送體制が形成されていった。河西および中央アジアへの軍

物輸送を支えた河西道の長行轉運體制は、そのひとつであり、多くが八世紀に屬すトゥルファン出土の交通關係文書は、實に當該體制の具體的な運用を明らかにする史料となるのである。

景穆太子と崔浩

— 北魏太武帝による廢佛前後の政局をめぐって —

川本芳昭

太武帝時代の廢佛は、言うまでもなく太武帝、崔浩、及び寇謙之の三者を中心として斷行されたものである。一方、これに反對する勢力の核にいたのは景穆太子拓跋晃であったが、この當時の政局の中心にあって政治を動かしていた四者は、寇謙之が太平眞君九年に卒したのに始まって、太武帝の崩御した正平二年までの四年の間に相次いで死去している。景穆太子を除いた三者の死に關する事柄は、當時の史書に相當明確に記述されているが、これに對し景穆太子の死に關する史書の記述には表現上の搖れが見られる。本報告ではまずそこに太武帝と景穆太子との間の深刻な對立が影響していたことを明らかにする。次いでその對立が如何なる原因によって生じたのかという點を華北統一後の北魏内部の路線鬭争との關連で考察し、北魏の場合、胡漢對立の存在のため他の時代に比べとりわけ求められた帝權確立・強化の問題がそこに絡んでいることを指摘する。また、太武帝は胡族と一體感を抱きつつ、漢化への施策をも採用するという矛盾した面を合わせもつ皇帝であるが、彼のこの矛